

## 春日部の麦ワラ帽子

真夏の風物に涼しさを添える麦ワラ帽子は、春日部市の特産品の一つです。

麦ワラ帽子が初めて生産されたのは、明治30年頃です。それ以前の春日部は、畑作地域で麦をおもに作っていました。なかでも粕壁は、宿場町の名残りを留めながら米麦の集散地として穀問屋が軒をつらねて賑わっていました。

その頃、農家の副業として麦ワラさなだ真田きようぎさなだや経木真田が作られ、輸出が盛んに行われていました。これら真田は「カンカン帽子」の付属として使用されていたようです。明治の文明開化が叫ばれて帽子の需要も多くなり、真田の生産が進むにつれて、地元の人たちが、これら真田の利用を研究工夫して手作りによる経木真田帽子を海兵用に作ったのが、春日部の麦ワラ帽子のはじまりと言われています。

麦ワラ帽子は、春日部と中国地方の広島・岡山で生産されていましたが、中国地方の麦ワラの方が上質のため春日部の製帽業者は競合をさけるため、和麦ワラの真田利用をあきらめ、中産国の麦ワラ（支那麦）を輸入

して製造するようになりました。中国産麦ワラは細く腰も強いので帽子に加工しても優雅で丈夫であったところから、鉄道省等の労働帽としても利用されていました。

帽子製造の最盛期には、家庭の婦人たちのかっこうの内職として経木真田編みが流行していました。これは、俗に「くで打ち<sup>ぶ</sup>」といわれ経木を細割りにした材料を真田ヒモ状に編み長さ約60<sup>位</sup>を一反としたものです。その他、「渦づくり」といって帽子の縫いはじめになる渦巻をつくる作業もあり、製帽業者のほとんどが家内工業でした。なかには工員を雇った企業もありましたが、家並の中から「ビューン」という独特の響きをもったミシンの音がこだましていました。製帽の工程は、渦に真田をつないで特殊ミシンで帽子の原型に縫いあげ、プレス機で整形し、硫黄でくん蒸した後、リボン、すべり等の附属をつけていくものです。

しかし、時代の移り変わりと共に業態も変遷して、戦後は中国産の麦ワラ真田の輸入が途絶えてしまい製帽業者の廃業が続出し、60軒以上もあつた製帽業者もいまは11軒となってしまいました。

昭和35年頃から中国産の麦ワラ真田の輸入が可能になり復活しましたが、原料の入手難と高価、帽子の需要の減少等から、帽子専業でなくストロー製品に幅を広げるようになり、現在はレジャー用または幼稚園児用の帽子等がその名残りとしてどめられているだけとなっています。

最近では、中国産のい草編みの円板を輸入し、それをプレス機で整形したうえで附属品を付け仕上げしたのも出荷されています。

初出「広報かすかべ 昭和五十六年八月」かすかべの歴史余話